援助した『後』にも考えて、理解を深める！

私立浜松学院中学校　教諭　中澤 純一

教科・科目：総合的な学習の時間・LHR　　対象学年（人数）：３年Ａ・Ｂ組（30 名）

概要

　ネパール大地震を受け、前年度より交流が深まっていたネパールの学校に対して、どのような支援ができるのかを生徒と考えた結果、文化祭においてチャリティーカフェや募金活動を行った。

　しかし、生徒の中で、支援金を集めたことで満足感を得て、行動が完結してしまっている点があったため、今一度、援助について考えるため“「援助」する前に考えよう(開発教育協会)”を取り入れ、援助とは何か、ネパールに対する緊急支援はどのような意味が現地にあったのか考えた。

文化祭でのチャリティーカフェ

授業の流れ

【導入】

A ネパールの伊藤さんからの手紙『現地からの情報収集』

　文化祭で行ったチャリティーカフェ及び募金で集めた29,500円を８月末に国際送金したことを伝える。さらに、生徒自身の手で集めた寄付金が、交流校のあるバグルン地区の人々のために役立つことを確認する。伊藤さんのメールから防災プロジェクトの概要を知り、地震によるネパールにおける政治情勢の混乱について触れる。

【展開】

B 「援助」する前に考えよう～一枚の看板～『寄付を考える』

　タイ旅行に行き、トレッキングに出かけることを生徒に伝える。（シミレーション）教師が状況カードを読み上げながら、パワーポイントのスライドショーを使用しながら紙芝居形式で話を進めていく。バーン村の一枚の看板（資料）を読みあげ、でバーン村に10ドル寄付するか否か考える。さらに、主人公であるアイ子の活動について各自及びグループで賛成するか否か考え、その理由も考える。

C 「援助」する前に考えよう～再びバーン村へ～『支援の多様性』

　教員集団が行うバーン村再訪の寸劇を鑑賞する。寸劇終了後、生徒一人ひとりが村人の役割カードを読み上げ、村には様々な立場の人がいて、それぞれの問題をもっていることに気づかせる。カード式分類法を用いて、バーン村にどのような支援が必要かグループごとに考える。

D 援助するヒト・団体・組織『日本の国際協力について』

　援助する側は、どのような立場があるのか、日本の国際協力の歴史について考えるため国際協力ふりかえり年表（Mundi 2014年１月号を元に作成）を配布し、生活班で相談し（　　）に入る語句をキーワードから選んで記入する。

【まとめ】

E ミレニアム開発目標（MDGｓ）ってなんだろう？

　国際協力ふりかえり年表のキーワードの中にもあったMDGｓに関するMundiのコピー（JICA機関誌　Mundi 2014年４月号）を配布し共有する。

工夫・配慮した点

【導入】

・ ワークショップのため、生活班（５人×６班）で座る。

【Point!】全員が参加しやすいグループ学習の形をとる。

・ 国際送金を知らない生徒もいるので、簡単に説明する。

・ 生徒自身の手で集めた寄付金が、交流校のあるバグルン地区の人々のために役立つことを確認する。

・ 近々の伊藤さんのメールから防災プロジェクトの概要を知る。

・ 伊藤さんのメールからネパールにおける政治情勢の混乱について触れる。

【展開】

・ パワーポイントでタイの位置、首都について示す。

・ トレッキング自体、生徒に馴染みがない言葉なので、説明を加える。

・ 教師が状況カードを読み上げながら、パワーポイントのスライドショーを使用して紙芝居形式で話を進めていく。

・班ごとに考え発表し共有することで、バーン村にどのような支援が必要か、援助する側にはどんな立場があるか自身で考えさせる。

【Point!】唯一の「正解」があるわけではなく、様々な異なる意見の共有にこそ意味があることを、あらかじめ生徒に伝える。発表の際は、話し合いのプロセスについても是非聞きたい。

・ 国際協力ふりかえり年表を活用することで、改めて日本の国際協力の歴史について知り考え、援助する側の思いや立場を考えさせる。

授業の様子

【まとめ】

・ MDGｓに対する今までの世界の国々の取り組みを知ることで、次回の授業で考えるSDGsの足がかりにもなるよう工夫する。

・ ワークシートにワークショップ全体を通して気づいたこと、考えたことを記入させる。

【Point!】時間をとって、きちんとふりかえさせることで定着度がグンと高まる。

生徒の感想・反応

Q1 アイ子さんの活動に賛成or反対か？

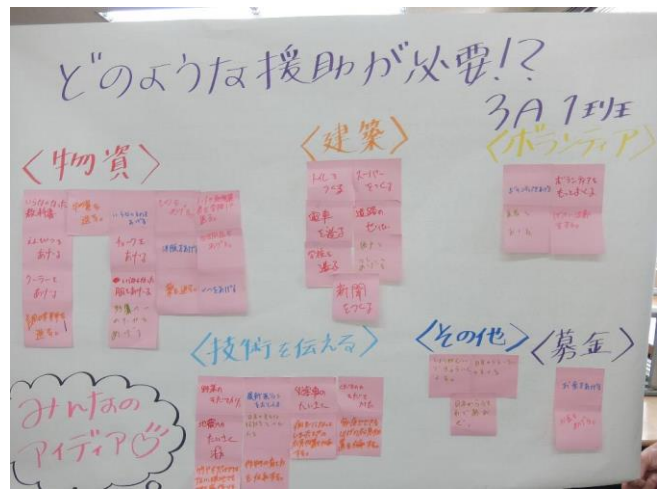
やや賛成と答えた生徒は28名中、23名で82%、賛成が４名で14%、反対が１名で4%だった。

・困った人に救いの手を差しのべてあげることは良いことだと思った。人々に優しくしてあげることも良いと思いった。（賛成）

・助けるために、募金活動を実行しているから良いことだと思う。（賛成）

・何もしないよりは良い。10ドルを寄付すると書いてあるだけでは、どこに寄付すれば良いのか分からない。（やや賛成）

・自分の意志で自分の国ではない所へ寄付することは良いことだと思う。（やや賛成）



ワークシート

Q2 ワークショップの感想

・援助することは大切だと思った。どんな協力ができるか考え、たくさんのアイディアを出すことができた。途上国の人々のことを考え、自分の協力で出来ることがあれば協力したいと思う。

・ネパール以外のことについても考え、バーン村にどのような支援ができるのか考えた。日本からバーン村に伝承できることが多くあり驚いた。

・このワークショップでは、途上国のために何をすれば良いのかと言うことがよく分かった。どうすれば色々な人から寄付してもらえるのかも解決することができた。

・個人的にお金をあげるという行為があまり好きではないので、もっと違う形で支援ができるようにしたい。

・色々な国が援助することが必要だと分かった。募金が色々なことに使われていて、自分がここに募金したいと思っても、望み通りにならないこともあることが分かった。

・貧しい村にどのような援助が出来るのかを考えた。そのようなことを考える中で、自分に出来る事もたくさんあったので、これからできる時があったら積極的に援助したい。

成果　～援助が現地に与える影響への理解が深まった～

ネパールの大地震を知り、考え、気づくと言ったプロセスに留まることなく、生徒自身が自発的に、どのような支援が出来るか考え行動に移したことで、実体験に基づき、援助とは何か、援助が現地に与える影響について理解を深めることが出来た。

文化祭で支援金を集めて満足していた生徒たちも、「途上国の人々のことを考え」、「どのような支援ができるのかを考えた」ことにより、支援、国際協力を自分事として深く理解することができたようだ。つまり、生徒たちが行った支援や将来的にするであろう支援を、「表層的な支援」から「意義をもった支援」に発展することができたと実感している。

本実践では、実際に交流を深めているネパールの中学校の学生やバグルン地区の地域住民と言った、生徒にとって身近な人々に対する援助と言う視点からも、マスメディアを通して知る途上国及び被災地支援と言った視点よりも、よりリアリティさを感じ取り組むことができた。

さらに、「援助」する前に考えようのワークショップの実施後、伊藤さんより送って頂いた防災プロジェクトの当日の様子を鑑賞する時間を設けた。防災プロジェクトでネパールの中学生が、地震における防災演劇をする様子や中学校校長のスピーチの中で本校との取り組みを取り上げてくださる様子、ネパールの中学生の歌うアンジェラ・アキさんの『手紙～拝啓十五の君へ～』から溢れるネパールの中学校と本校の絆の深さを感じ、本校の生徒は食い入るようにスクリーンを見つめていた。自分達の援助が見える形で役立っていることに感慨深さを感じ生徒の顔に笑みがこぼれていた。

なお、「援助」する前に考えようのワークショップは、本来ならばネパールのバグルン地区に国際送金する前に行い、もっと現地とも情報交換を行った上で実際の援助を行った方が良かったかもしれない。しかし、今回は緊急支援の目的で文化祭での義援金を送ったこともあり、これも一つの援助の仕方であると生徒自身が理解でき目的は達成できたと確信している。

教材・資料

・ネパール地震に関する新聞記事

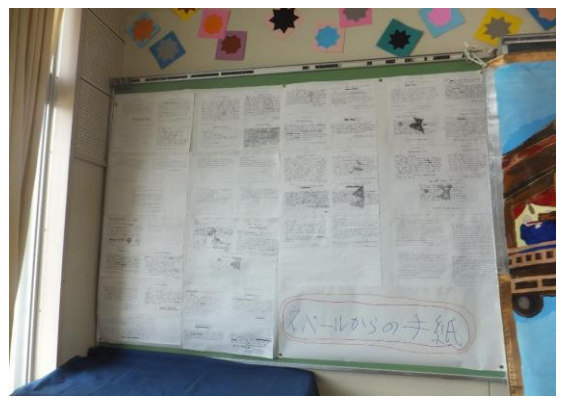
・JICA機関誌　Mundi 2014年１月号（国際協力ふりかえり年表）

・JICA機関誌　Mundi 2014年４月号　p.4-7（特集ミレニアム開発目標（MDGｓ））

・DEAR 開発教育協会　「援助」する前に考えよう～参加型開発とPLAがわかる本～　p6-17（第Ⅰ部 ワーク１ 一枚の看板）

授業の様子

防災プロジェクト



ネパールの中学生からの手紙